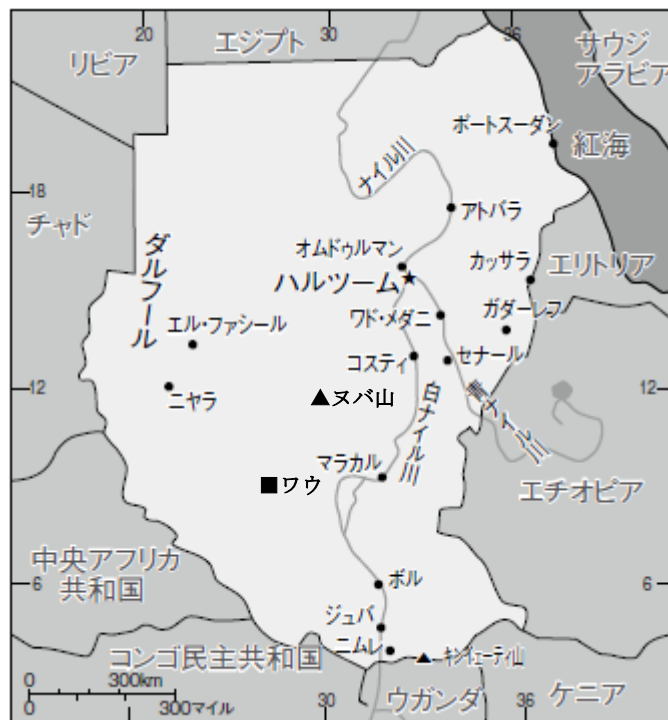


## コラム 1

# アラブとアフリカにまたがる国スーダン

スーダンはアフリカ大陸のアラブ文化圏とアフリカ文化圏の境界に位置する国で、2011年の南スーダン独立前はアフリカ最大の面積（250万平方キロ、日本の約7倍）の面積を擁し、アフリカ9カ国と国境を接しており、人口約3,900万人（2008年人口センサス）、面積約250万平方キロ（日本の約7倍）のアフリカ最大の領土を持っていた。スーダンは地理的に特筆すべき特徴がある。エチオピアのタナ湖を起源とする青ナイル川、ウガンダのビクトリア湖を起源とする白ナイル川が一本の川、ナイル川となってエジプトへ北上する、この合流点が首都ハルツームとなっている。

南部独立前のスーダン



また文化的に見ても、国の南半分では、主に非イスラムのアフリカ系の民族が居住しており、北半分では大多数はイスラム教徒であるが、ナイル川沿いにはアラブ系民族、ダルフールや東部地域などは、非アラブ系民族が主流を占めている。古くはサハラ砂漠を通じた交易や巡礼が盛んであったため、ハウザ族など民族も居住し、文化、民族、宗教、気候、自然資源など、一国の中で非常に多様性に富んだ特徴をもった国<sup>1</sup>であった。

<sup>1</sup> 民族構成は、いわゆる「アラブ系」（混血やアラブ化された非アラブ含む）は全体の約40%であり、「アフリカ系」は、52%と推計されている

---

スーダンの歴史は、古代エジプト時代に遡る。エジプト文明時代、古代エジプトは、金や象牙の交易拠点であるスーダンの北部のナイル川沿いの占領を繰り返していた。紀元前2500年ごろ、ヌビア系の部族が、クッシュ王国を建設し、鉄器を中心とする文化が栄え、当時既に金やエメラルドも産出していたが、新エジプト王国に滅ぼされた。クッシュ王国は紀元前7世紀頃再興し、以降約1000年の間栄え、現在の北部州からナイル川州のナイル川沿いに、エジプトより多い1000基以上のピラミッドが建設された。

これらの遺跡は世界遺産<sup>2</sup>に指定されており、今日多くの観光客が訪れる観光スポットとなっている。

### 写真 メロウエー遺跡



そのクッシュ王国も、4世紀頃エチオピア高原のアクスム王国によって滅ぼされ、国は北からノバティア、マクリア、アルワの三王国に分かれた。三国ともに5世紀頃にキリスト教を受容し、以後1000年近くキリスト教を信仰し続けたが、やがて13世紀頃からアラブ系のイスラム教勢力の侵入を受け、1505年には、北部スーダンの青ナイル川沿いのセナールを首都として、イスラム教国家のフンジ王国が建国され、ナイル川沿いのキリスト教勢力は消滅した。1596年には西部のダルフル地方においてもイスラム教のダルフル王国が建国され、16世紀末までに、現在の北部スーダンの大半がイスラム化された。この当時から南部スーダン人を奴隷として、アラブ諸国に輸出することも行われていた。

1820年頃、当時オスマン帝国に支配されていたエジプトが国力増強<sup>3</sup>を目的に、フンジ王国を侵攻し、支配下におさめたが、ダルフル帝国には激しく抵抗され、また南部スーダンも全土までは実効支配が及ばなかった。

---

<sup>2</sup> 「ゲベル・バルカルとナパタ地域遺跡群」は2003年に世界遺産に登録された。

<sup>3</sup> 当時のエジプトはムハンマド・アリー朝で、スーダンからの奴隷貿易や資源を手に入れることをもくろんでいたといわれている。

---

1883年にはスーダン人の英雄ムハンマド・アフマド（「マフディ」と自称）がエジプト軍を退け、「マフディ教国」を樹立したが、マフディ教国も、1898年には、英国・エジプトの連合軍に制圧され、英国の保護によるエジプト支配<sup>4</sup>の時代に入った。この当時、欧州の列強が、アフリカで激しい植民地争いを行っており、フランスはアルジェリアから東進してきており、ファシヨダ（現在の南スーダン・上ナイル州付近）を占領していた。この問題は、英仏の本国で協議され、仏がモロッコの権益を得る代わりに、南部スーダンから撤退することとなった。アングロ・エジプト・スーダン時代の南部スーダンは、1910年頃から、総督府がおかれナイル川河川交通の終点でもあるジュバを統治の拠点とするべく、町の整備がなされた。

1898年に始まったアングロ・エジプト・スーダン時代は、スーダンは、事実上、英国により統治されていた。英国は将来的にはスーダン南部はウガンダなどの東アフリカ諸国に統合させる意向をもっており、1924年には南部の独自性を強めるために、「分断政策」<sup>5</sup>を打ち出し、アラブ商人の追放、非アラブ人（ギリシャ人）商人の誘致、公用語としてアラビア語を禁止し、英語に変更するなどの方策が実施された。ところが、1947年になり、「ジュバ会議」を経て、英国はこれまでの方針を覆し、スーダン南部は、「スーダン」の一部として統治されることが決まった。

こうした変遷を経て、欧州列強の力関係で定められた境界線により、20世紀初頭に南部独立前のスーダンの国の形が決まり、第1次世界大戦後の1956年1月、スーダンは英国・エジプトの共同統治から独立を果たした。

以上

---

<sup>4</sup> 「アングロ・エジプト・スーダン」と呼ばれている

<sup>5</sup> 「分断政策」は、表向きには、南部スーダン人の保護や疫病の防止という名目で行われたが、①東アフリカ諸国への統合の他に、②南北の対立を煽り反目化させ、安定・統合したスーダンを創らせない意図があったと指摘する